令和５年度小松市立木場小学校　学校評価　１（年度末）

めざす児童生徒像

よく考え工夫する子（思索）【主体的に学ぶ力　学びを生かす力　表現する力】
たくましい心と体の子（剛健）【挑戦する意欲　最後までやり抜く力　健康を管理する力】
思いやりの心で協力し合う子（誠実）【対話する力　協働する力　自他の良さを認める力】

※児童生徒結果－教員結果・保護者結果

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		中間 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	年度末 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
学校重点項目（学校で設定）	組織的な学校運営	木場の校風づくり	各項目90%以上の達成率にする。	①	児童は自分を高めようと意欲を持って粘り強く努力している。	88.9%	92.9%	75.4%	17.5%	100.0%	92.6%	77.9%	22.1%	①については、中間評価以上に保護者と児童・職員との差がひらき、保護者が22%程度低く評価している。 ②についても中間評価とほぼ同じ結果で、職員より児童・保護者が15%程度低く評価している。	どちらも保護者の評価としてすぐに表れにくい内容であるが、①については、家庭での学習する姿勢（意欲）の大切さを児童に説き、②については児童のよさや成長が児童自身に実感できる評価を教師が意識して行うことを継続し、児童の姿が変わるようにしていく。 また、両項目について行事等の振り返りでは「粘り強く」「思いやり」のキーワードを意識されるようにしていく。
				②	児童は周囲に対して、思いやりの心で接し、互いの良さを認め合っている。	100.0%	87.5%	88.4%	12.5%	100.0%	85.3%	88.2%	14.7%		
				③	チーム学校として、全職員が専門性を生かし、やりがいをもって業務にあたっている。	88.9%				80.0%					
					集計										

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目										達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	働き方や業務の改善		各項目90%以上の達成率にする。	①	80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	33.3%				50.0%				①については、中間評価と同様、8～11月の時間外勤務時間の平均はどれも45時間未満。個人的にも80時間を超える職員は0名。肯定的割合が微増の50%となった。 ②③についても微減ではあるが約90%の結果となった。	8月からの常勤講師の配置により大きく担当時数や分掌の負担が軽減され、スクールサポートスタッフの活用や職員会議のペーパーレス化により改善が図られた。次年度に向け、行事等の見直しを図り、業務改善に取り組む。
				②	学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	100.0%				90.0%					
				③	互いに相談したり協力したりする体制ができている。	100.0%				88.9%					

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	①の達成率を中間95%、年度末100%にする。	①	研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	100.0%				100.0%				・中間評価と同様、100%となり、目標指数を達成できた。 ・課題であったペア・グループ学習について、要請訪問で助言いただいたことで、その後の授業デモンストレーションで、教員・児童ともにポイント共通理解することができた。そして、共通実践として学級ごとに目標を掲げて行うことで、その後の研究授業で実践の成果を児童の姿から共有できた。	・単元構想シートや今年度の取組について部会で振り返ったものをもとに、見直しをしたり来年度の取組に繋げたりできるようにしていく。 ・「学び合うための聞き方・話し方」「授業交流」「子ども授業参観」などの共通実践を来年度も継続して進めていく。
				②	授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100.0%				100.0%					
					集計										
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	①②⑤の平均を中間85%以上、年度末90%以上にする。	①	児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	88.9%	87.0%		-1.9%	100.0%	86.8%		-13.2%	・①②⑤の平均が教員100%、児童88.7%と、児童の平均は目標より－1．3%だった。また、中間評価とは反対に、教員の平均数値と児童の平均数値では教員が10%以上高い結果となった。 ・①②の数値については、2学期を中心に行った「考えを深めるためのペア・グループ学習」の取組の成果が要因の1つかと考える。また、中間で大きな差が見られた⑤については、差は8．8%となった。話し合い活動を充実させることで、1人1人の考えに深まりや変化が表れた結果かと考える。	・①②については、ペア・グループ学習だけでなく、そのあとの全体での話し合いにおいても、友達と考えを交流することで深めたり広げたりできるようコーディネートしていく。話し合うときには、比較、精選をしたり、考えを練り上げたりできるような交流になるよう授業構成を工夫し、⑤の振り返りに繋げていく。 ・⑤については、これまで同様、単元のゴールの姿を具体的にもち、児童と共有する。振り返りでは、「参考になった考え」や「考えが変わったきっかけ」など、より具体的な視点を与えることで、変化を実感できるようにしていきたい。
				②	児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。	77.8%	88.4%		10.6%	100.0%	88.2%		-11.8%		
				③	児童生徒は、自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組み立てなどを工夫して発表している。	88.9%	87.0%		-1.9%	90.0%	86.8%		-3.2%		
				④	児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	77.8%	85.5%		7.7%	90.0%	88.2%		-1.8%		
				⑤	児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり，学びに対する達成感を得られたりしている。	66.7%	91.3%		24.6%	100.0%	91.2%		-8.8%		
				⑥	児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	88.9%	94.2%		5.3%	100.0%	89.7%		-10.3%		
					集計										
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	②③の項目で、肯定的な回答をした教員が90%以上にする。	①	指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	100.0%				100.0%				②について、研究主任とも連携し、単元構想を練る時にカリキュラムマップを見て力を生かす場を確認し、実施できた。 ③について、本校の課題にあわせた1問分析を行い、各学年で2学期の重点単元を設定し、実践することができた。しかし、評価問題での達成状況を見ると、学力の定着は十分とは言えない。共通実践として、毎月のパワーアップシートでの振り返りにより、各担任が意識して取り組むことができた。	②について、年度末に研究を中心としたカリキュラムマップの見直しをしていく。また、教科書の変更にも合わせていく。 ③について、3学期も帯タイムや授業での取り組みを見直し、再度、取り組む。また、校長ビジョンに沿った各部の取組を推進するために、パワーアップシートを活用することがとても有効だったので、来年度も引き続き継続していく。
				②	児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立している。	100.0%				100.0%					
				③	全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	100.0%				100.0%					
				④	校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	88.9%				80.0%					
					集計										
		家庭学習	①児童の「計画を立てて勉強している」を90%以上にする。	①	家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	100.0%	78.7%		-21.3%	100.0%	76.6%		-23.4%	①について、目標値に－13.4%となった。家庭学習強化週間の後に検定を行うことで、強化週間では計画的に学習に取り組むことができた。「計画的」の具体的な内容を示したが、児童が家庭学習を計画的に行う習慣がついたとは言い難い。	「計画的に取り組む」ことについて、学年に応じた取り組みを担任とともに立案し、提案していきたい。
				②	学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	77.8%	47.8%		-30.0%	100.0%	83.8%		-16.2%		
					集計										

令和５年度小松市立木場小学校　学校評価２

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・８月提出）	取組の成果と課題（年度末・３月提出）
生徒指導・児童会	児童の主体性を育むための積極的な生徒指導 ・児童会の活動に児童のアイデアを積極的に取り入れるように工夫することで、児童の主体性や自主性をはぐくむ。 ・学校の掲示板を効果的に使うことで、各委員会の取り組みが分かるようにし、自己有用感や達成感を持たせる。 ・教職員の日常的な児童の情報交換はもちろん、年２回の木場っ子アンケートを基に、担任や児童が話しやすい職員と面談する場を設定することで、より深い児童理解を行う。	・各委員会で児童主体の取り組みを行っていた。例えば運営委員では、みんなで遊ぼう運動と題し、一週間に一度、全校児童でドッジボールや鬼ごっこなどの運動に親しみながら交流を図った。 ・各委員会の取り組み写真やイベントのお知らせ、生き物クイズなど、取り組みが分かるものを掲示することで、自己有用感や達成感を持たせることができている。 ・１回目の木場っ子アンケートをもとに全学年、学級で全児童を対象に担任と面談することができた。また、それらのアンケートの結果を全教職員に提示することで児童の情報を共有している。	・創立１５０周年の取組として、人文字や全校かくれんぼ、木場ライブステージなど、各学年、委員会が主体となって、学校が楽しくなるようなイベントができた。参加した児童はもちろん、その取り組みを計画した児童の表情もとても達成感に満ち溢れていた。 ・各委員会の取り組みを掲示板に随時更新していくことで、取組を視覚化した。 ・定期的な児童理解の会の実施や木場っ子アンケートをもとにした全校児童への聞き取りをするとともに、全職員で情報共有することで、組織的で、積極的な生徒指導が行えている。また、対応が難しいケースでは、チームとなり、複数の教職員が協力して問題解決に向け、取り組めた。 ・２学期の木場っ子アンケートの聞き取りでは、児童の実態に応じ、児童が話しやすい職員と面談する場を設定することで、より深い児童理解を行うことができた。
安全指導	命を守る取組を推進し、児童の安全への意識を高める ・計画的に避難訓練を行い、非常事態が起こった際の避難の仕方を児童と職員で共有する。 ・集団登下校訓練、交通安全教室などを行い、児童の交通ルールを守ろうとする意識を高める。 ・定期的に職員が校舎の安全点検を行うことで、事故の未然防止を防ぐ。 ・廊下の歩き方や体育館使用のルール確認等については、児童会活動と絡めて行うことで、児童の安全への意識を高める。	・１学期中に授業中の避難訓練、休み時間中の避難訓練を実施し、避難の仕方を児童と職員で共有することができた。 ・１学期中に集団登下校訓練、交通安全教室を行ったため、害獣対応で、集団登下校をした際には、安全に登下校することができた。今年度はまだ実施していないが、引き渡し訓練を毎年実施している成果で、熊対応の児童の引き渡しの際には保護者と地域が連携し、スムーズに実施することができた。 ・隔月に１回、職員が校舎の安全点検を行うことで、事故の未然防止に努めている。	・２学期に不審者対応訓練を実施し、実際に不審者が侵入した際の教職員の動き、児童の動きを確認することができた。 ・２学期も熊対応での引き渡しがあったが、回を重ねることで職員と保護者、地域との連携が、スムーズになっている。 ・隔月に１回、職員が校舎の安全点検を行うことで、事故の未然防止に努めることができた。 ・廊下や階段の歩き方については、児童会と連携し、安全についての取り組みを行うことで、より安全の意識を高めていく。 ・今年度、集団登校をする機会が多かったが、安全に落ち着いて集団登校することができたため、これを来年度にもつなげていきたい。
特別支援教育・教育相談	児童一人ひとりの発達課題に応じた教育支援体制の充実 ・様々な発達の課題をかかえる児童について、実態を把握し情報共有するため個別の支援シートを作成し、定期的に特別支援校内委員会を開催する。 ・特別支援校内委員会や児童理解の会などで教職員全員で有効な支援方法について共有し支援にあたる。 ・必要に応じて専門相談員を招聘や外部機関との連携を図り、児童の特性の理解や効果的な支援方法について助言を受ける。	・様々な問題を抱えた児童の個別の支援シートをもとに、４月と７月に校内特別委員会を開催し、職員で児童の情報共有を図ることができた。 ・職員会議後に児童理解の会を定期的に行った。定期的に児童の情報を交流することができ、児童の支援に役立てることができている。 ・２学期以降に専門相談員を招聘し、児童の特性の理解や効果的な支援方法について助言を受ける予定である。	・児童の学校生活に関する情報共有を図り、発達課題を抱えた児童については個別の支援シートを作成して学期ごとに特別支援校内委員会を開いて支援の手立てを検討した。 ・職員会議後やその都度必要な時に児童理解の会を開き、児童の学校生活や放課後の様子について情報交換と指導方針を確認することができた。 ・小松特別支援学校より専門相談員を招聘し、学習面で気になる児童の見取りを行うとともに、有効な支援方法について助言を受けることができた。
道徳教育	道徳教育を中心とした教育活動全般の充実を図る ・定期的に道徳の授業づくり等の情報を発信・共有することで、教員の道徳教育の充実を図る。 ・重点項目の取組を他教科や活動と関連づけられるようカリキュラムマップを意識した道徳教育の推進をする。 ・家庭、地域と連携した道徳を推進していくために年に１回授業参観で道徳の授業を公開する。	・１学期中に２回、道徳通信を職員向けに発行した。通信を通して、授業づくりのポイントや評価の仕方を教職員に伝えることができた。 ・全学年がカリキュラムマップを見て、重点項目を他教科と関連付けて道徳教育をすることができている。 ・全学年、学級において、授業参観で道徳の授業を公開することができた。	・研究校の道徳の授業を参観し、授業の構想や発問の仕方、ICTの活用方法などを研修報告の場で、全教職員に共有することができた。 ・全学年がカリキュラムマップに従い、重点項目を他教科と関連付けて道徳教育をすることができた。
情報教育	ICT端末の効果的な活用を図る ・ICT端末の効果的な活用を模索し、成果と課題に職員間での情報の共有を図るための研修を充実させる。 ・児童がICT端末を日常的に使えるような環境整備を行い、学年の実態に応じた情報スキル習得を図る。 ・情報モラル教育の職員研修の充実させ、児童への情報モラルの習熟を図る。 ・全職員でHPの更新を分担して行い、更新回数を増やすことで、学校の取り組みをより積極的に発信する。	・職員会議でGIGA研修の時間を設け、教員同士の実践の交流を行った。教員が授業で使えるように、活用例だけでなく、設定の方法などを中心に情報交換したことで、自分の学級でどのように活用できそうかという視点で交流ができている。 ・学習用端末を活用して児童への情報伝達やアンケート回答において、日常的に活用することができた。2学期は、授業での活用を目標にICT端末を使用する。 ・HPの更新が滞り、遅れてしまうことがあったので、教員間で声をかけ合い、2学期は更新が遅れないようにする。	・1年を通じて、職員会議後のGIGA研修の時間を設けたことで、活用例を紹介でき、職員間での情報の共有を図ることができた。また、報告のための成果物をなくしたことで職員の負担は少なくなった。日々の小さな活用例を紹介できるような場を来年度以降も設定し、学校全体の情報スキルが向上するようにしていく。 ・学習用端末を使った情報伝達やアンケート回答などは学年関係なく慣れが見られるようになった。ただし、情報スキルの習得には、担任裁量の部分が多かったため、学年の系統表を作成し、この学年でつけるべきスキルを確実に習得できるようにしていく。 ・情報モラルに職員研修を実施したが、日頃の児童の様子を見ながら適切な指導も必要である。計画的な取り組みと必要に応じた指導を行いながら情報モラルの確実な育成を図っていく。 ・担当から声を掛けることでHPの更新が実施できた。
読書教育	図書の充実を図り、児童の読書意欲を高める ・年間の計画をもとに図書室を利用したり、教科にあった本や「本のとびら」の貸し出しを行ったりすることで、児童の読書の幅を広げる。 ・図書委員を中心に、いろいろな本の紹介やクイズ・ゲームなど児童主体の取組を発信し、本への興味を高める。 ・「学校読書の日」には家族読書に取り組み、家族で読書に親しむ機会を増やす。 ・図書ボランティアと連携し、より豊かな読書経験の機会を与える。	・「本のお部屋」を教室に置いたり、「本のとびら」を活用したりすることで、読書の幅は広がっている。今後も、年間計画をもとに、学習に合わせた本や図書室を利用できるように進める。 ・図書委員の「図書ビンゴ」の取組により、さまざまな分類の本を読むことができ、低学年は図書の分類についても知る機会となった。また、取組があった6月は、ほとんどの学年で貸出冊数が増えた。2学期以降も、児童が進んで図書室を利用し、読書に親しめる取組を行う。 ・全校で家族読書に取り組むことができた。 ・低学年では紙芝居や絵本、高学年では落語といった学年に合った読み聞かせを行うことができた。 ・4月に図書ボランティアの募集を呼びかけたことで、2名の参加希望があった。2学期は高学年の読み聞かせの機会も増やす。	・「本のお部屋」は、読破をした児童は少なかったが、国語科の学習の中で手に取って読むこともあった。また、学年の目標冊数・ページ数を達成していても「本のとびら」を読んでいる児童が少ない学年もあり、学級によって差が見られた。読書の幅を広げる目的やよさを職員間でも共通理解した上で、児童への声掛けをしていく。 ・学期に１回のイベントを計画し、「クイズラリー」では、たくさんの児童が参加していた。答えを確認するために該当の本を読む児童もおり、読んだことのない本にも親しむことのできる機会となった。「読み聞かせ」では、低中高に分かれて行い、お話に合わせて体を動かすなど一緒に楽しめる工夫を取り入れることで、参加していた児童は興味を持って聞いていた。今後も、さまざまな形で、図書室利用・読書の推進を呼びかけていきたい。 ・家族読書は、全校で取り組むことができた。児童が選んだ本に限らず、国語科に合わせた本を担任から発信するなどし、より必要感をもった取り組みになるとよい。 ・図書ボランティアの参加が増えたことで、学年や時期に合わせた読み聞かせをたくさんの学年で行うことができた。図書ボランティアとの会話も児童の楽しみの一つとなっていた。
保健健康教育	自己の健康を管理する能力の育成 ・学期に１回「生活チェックカード」を実施し、睡眠状況やメディアコントロール、姿勢について実態を把握する。その結果から次回のチェックカードでは自らが課題を設定し取り組めるようにする。 ・各学級で１回以上睡眠について学習し、保健だより等で保護者にも啓発する。 ・姿勢の大切さについて学校保健委員会等で指導し、児童に姿勢を正しくしようとする意識を持たせる。	・生活チェックカードの結果、「早寝早起きを意識して生活できた」と答えた児童の割合は８６%、「ストップメディアを意識できた」と答えた児童の割合は９３%だった。学年にバラつきがあったものの肯定的な回答が多かった。しかし、「良い姿勢を意識できた」と答えた児童の割合は７４%と低かったので、今後は姿勢の大切さについて保健指導をしたり、学校保健員会で啓発したりする予定である。 ・1学期は２，４年生で睡眠学習、1年と3年で食育を行うことができた。2学期以降も計画的に睡眠学習・食育を進める。	・１学期の生活チェックカードの結果と比較すると、すべての項目において「できた・だいたいできた」と答えた割合が低下した。各学年で保健指導を行い、良い生活習慣を身に付けることの大切さは理解しているものの、行動に移すことがなかなかできないようである。次年度は児童の実態に応じて、取組項目や時期を検討する。 ・学校保健委員会では児童がアンケート結果を発表したり、木場っ子トレーニングを実施したりして、保護者にも姿勢の大切さを啓発でき、児童が健康情報を発信できる場を設けることができた。 ・計画的に睡眠学習・食育をすすめることができたので今後も継続して取り組む。
体力向上	年間を通した体力向上の取組の推進 ・「木場っ子トレーニング」として短時間できる体幹トレーニングを継続的に行い、児童の姿勢維持や体力、集中力の向上を図る。 ・各学期に「スポチャレいしかわ」の強化週間を設け、意欲を高めるとともに、運動習慣の定着と体力の向上を図る。 ・体力テストや持久走大会へ向けての練習等において、学習カードを活用し、自己の成長を実感させ、意欲につなげる。	・健康委員会で木場っ子トレーニングのお手本動画を撮り、全校に共有した。また、集会で健康委員会の児童による木場っ子トレーニングの啓発のための発表をしたり、姿勢に関する掲示を行ったりした。児童アンケートでは83.6%の児童が、頑張って取り組んだと回答しており、これらの取組が木場っ子トレーニングの推進につながったといえる。5月に行った体幹力チェックでは、達成率が42%だったので、取組を継続し、体幹力の向上を図りたい。 ・1学期では、6月にスポチャレいしかわのシャトルボールの強化週間を設け、取組の推進を行った。取り組み結果を記録する掲示を行い、記録の更新や取組回数が分かるようにし、児童の意欲の向上を図った。2学期では種目を変えて強化週間を設定し、取組の継続を行う。 ・体力テストに向けて、前年度の個々の記録や、県の平均などを記載した学習カードを用意した。前年度の自分や県の同学年の平均の記録と比較することで、自己の成長を実感させ意欲の向上を図った。2学期に行う持久走大会でも、学習カードを活用し、児童の意欲向上につなげる。	・健康委員会による木場っ子トレーニングのお手本動画の種類を増やし、意欲が継続するようにした。また、学校保健委員会では、木場っ子トレーニングを取り上げ、児童だけでなく地域や保護者の方にも取組の周知とその効果の理解を図った。児童アンケートでは、82.6%の児童が頑張って取り組んだと回答しており、若干肯定的な意見が減少したものの、年間を通して全校で取り組むことができたと分かる。10月に行った体幹力チェックでは、達成率が68%と向上し、取組の効果が感じられる結果であった。 ・2学期でも、11月にスポチャレ強化週間を設け、40mや1学期に引き続きシャトルボールに取り組んだ。強化週間を設けることで、全学級がスポチャレいしかわに取り組むことができ、体力や学級力の向上を図ることができたと感じる。 ・持久走大会では、学習カードを活用し、自分の目標を持って練習に臨むことができた。カードに練習の過程を記録することで、本番の結果だけでなく、それまでの頑張りを認めることにつながった。
地域・家庭連携	地域・家庭に開かれた学校づくり ・150周年を機に、地域と連携した取組の中で、教育活動の理解を広める。 ・地域の環境や人材を活用した学習活動の実践を推進し、深まりや広がりのある学校教育活動を実践する。 ・地域・家庭と連携し、学校教育（学習・安全・健康）に協力体制を構築する。特に家庭とは児童の学習活動への理解と協力が深まるような取組を工夫する。 ・HP、通信などで地域・家庭に教育活動の情報発信をていねいに行う。	・150周年記念の取組としてキャラクターや植樹、運動会（スローガン、写真）など、具体的に子ども達の発想で動き始めている。 ・1・2年…町探検、3年…安全マップ作り、4年…ビオトープ・モリアオガエル観察、5・6年…野鳥観察、全学年…東園地体験プログラム と、計画的に地域及び人材を活用し、教科や教科横断的に学習に結びつけることができている。 ・保護者アンケートでは、肯定的回答１：55.1%、２：42.0%併せて97.1%となっており、日頃の情報発信が家庭に届いていると言える。	・創立150周年記念式典を学校公開を同時開催としたことで、多くの地域の方々や卒業生に日頃の教育活動にも目を向けてもらえるいい機会となった。 ・今年度は、全学年が木場潟東園地の体験プログラムモニター校の活動に参加し、多くの体験活動ができた。次年度以降は、今年度の取組を見直し、必要な学年に適切な時期に体験させるように計画する。 ・保護者アンケートでは、88.1%で、中間評価に比べると低い評価となった。校外活動等での報道も含め、HP,学校だより等、教育活動についてこれからも情報発信を継続する。

学校関係者評価	（中間評価に対して　8月学校関係者評価委員会より） ・子ども達はのびのびと喜んで学校に通っている。　・先生たちもよく頑張ってもらっている。　・子どもたち自身がこのようなアンケートに答えられているのが素晴らしい。 ・交通やクマなど、子ども達の安全確保のため、連携していきたい。　・朝の登校時、昼で会った際、それぞれあいさつがありきちんとできている。 ・子供一人一人異なる成長曲線があるが、授業を参観すると、これを配慮していることが感じられる。 ・150周年に向けて子ども達のベクトルを1本にまとめる仕掛けが見られる。子ども達の心に残るものにしてほしい。 ・コロナはまだ続いているがひところに比べるとずいぶん開放的になり、子ども達も活発に活動しているように思う。 ・コンピュータ（学習用端末）の使用について、コロナのおかげと言ってよいのか、使いこなせる子供たちが増えている。 ・朝の防犯隊の活動で交差点に立った際、「おはようございます」と元気にあいさつしてくれる児童がいてとてもうれしい。 ・校長指導の下、各教師の努力で、子ども達は事故もなく元気に頑張っている様子がうかがえる。 （最終評価に対して　2月学校関係者評価委員会より） ・学校職員が子ども達のために一生懸命に取り組んでいる様子がうかがえる。 ・保護者の数値が低い項目があったが、児童が学校で頑張って、家庭では息抜きをしている結果ではないか。（息抜きができる家庭があることは良いことである。） ・挨拶をしてくれる子に大きな元気をもらえる。反面、挨拶を返せない子がいる。（大人が繰り返して顔を覚えてもらうことも大切だと思う。） ・1月の地震後の子どもの心のケアについて。（学校では出さない心のショックもあるのできめ細やかに見てほしい） ・地震などの非常時では、教師が慌てては一番ダメなので、頭でわかるだけでなく、体で覚えて動ける訓練をしてほしい。 ・地震に備えては、普段は椅子の座布団として使える頭巾もあるので使用について一考してほしい。